

「私達に何ができるのか」

喜界町立喜界中学校 二年 喜^{きてい}禎 あさひ

二〇二〇年三月、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、学校は長い休業中。その間ネットニュースで各地の情報をキャッチするのが日課になっていたが、十三日、ニューヨーク発の記事の見出しを見て、私は思わず愕然とした。

ウイルスの感染は、中国から日本へ、そして、急速に欧米諸国、世界全体に拡大しており、最大の問題は、新型のウイルスのため、性質が分からないこと、そのため治療薬もワクチンもないこと。収束させるためには、感染を止めるしかなく、その一番の予防策として示されたのが、「手洗い、うがい」だった。それは、私達の日常では当たり前のこと、誰にでもできる。私の中では、予防策がそれしかないことが、不安な気持ちにもなっていた。しかし、私が目にしたのは、もっと驚くべき現実だった。

記事によると、「世界人口の四十％、約三十億人が、石けんと水で手を洗うことができない。」とユニセフが、警告を発したというのだ。世界の四十七％の学校には石けんと水で手を洗う設備がないこと、医療施設でさえ、十六％の患者が治療を受ける場所にまともなトイレや手洗い設備がないことが書かれていた。もちろん、これまでの授業や日々のニュースなどから、途上国の中に、そういう地域があることは私も知っていた。だが、まさかこれほどまでとは。そして、驚いている私の横で、母が言った。「まだこんなに酷い状態だったんだね。お母さん達が小さい頃から世界の多くの子供達が、綺麗な水が飲めない。水道がない。という話はよく聞いていたのよ。」母の小さい頃とはいつのことなの。何十年も前のことなの。思わず、私と母は顔を見合わせて、言葉もなく大きく息を吐いた。

それから私は、あらゆる言葉で検索し、たくさんの記事を読んだ。未だ、紛争が継続し

ている地域があること、貧困や飢餓、水の確保や衛生問題など、悲惨な状況が続いている国があること。更に、汚染された水によってコレラ、赤痢など、様々な感染症を引き起こす可能性があることを知った。また、毎日の遠方までの水汲みにより教育を受けることさえできず、貧困の連鎖も起こっていること。水の問題が、教育を受ける事さえできなくしていた。日本で暮らす私達の生活が、どんなに恵まれているのか、頭の中で私は何度もそうつぶやいていた。

私にできることがあるだろうか。こうした途上国の水問題の解決策としては、井戸や水道設備の設置、整備。トイレなどの衛生施設の整備。そして、健康維持と生活環境改善などの衛生啓発。ユニセフは、支援をさらに強化している、ということだったが、支援活動やその手はまだまだ不足しているらしい。

まずは、知ることから。日本で恵まれた環境で暮らす私達は、知らないことが多すぎる

のかもしれない。そして、できる支援として一般的なのは、寄付だ。例えば数百円の支援で経口補水塩、家庭用衛生キットなどを多くの子どもたちに提供でき、一錠で四、五リットルの水を浄化できる浄水剤なども購入できるらしい。一人ひとりが少額でも寄付をすることで大きな金額となり多くの子どもを救うことができる。毎年、私達も、「赤い羽募金」を生徒会で取り組んでいる。同じように、何かできるかもしれない。

今はまだ先は見えないが、新型コロナウイルスは収束していくだろう。しかし、「水」の問題は、これから先いつまで続くのだろうか。まさに、「水は命」だ。水溜まりの水をすくって飲む小さな子供の姿が頭に焼きついて離れない。今ある生活に感謝し、中学生の私にできること、将来の私にできることを、考えたい。